

シリーズ[§]『青松』を読む[§]⑤

手づくりを保つ¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて——

阿部 安成

series[§]『青松』を読む[§]①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series[§]『青松』を読む[§]②手づくりで詠む、wps244、2016.01

series[§]『青松』を読む[§]③手づくりで偲ぶ、wps250、2016.04

series[§]『青松』を読む[§]④手づくりで悼む、wps251、2016.04

2015/4/5 瀬戸内海に霧

発行 ここで手書き手づくり『青松』の発行をふりかえっておこう。創刊第1号は1944年11月30日の発行、第2号の発行年月日は不明ながらも、前号からそう時日をおかずにつくられたようす、第3号は1945年1月22日発行とおもわれ、第4号は1945年2月発行、第5号「故北山謙三氏追悼号」は同年2月下旬から3月中旬までのあいだの発行、第6号「故上本隆重氏追悼号」は同年4月上旬にはつくられたとおもわれる。そして第7号が1945年4月発行となる。

実質の追悼号となった第4号もふくめると創刊から第6号までのうち3号分が故人を悼む号として編まれたこととなり、それらは故人逝去の月日にあわせて発行されたともいえようが、そうした事情がありながらもこの「廻覧雑誌」は、おおよそ月刊の間合を保っていた。

¹⁾ 本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)の成果の1つである。

さきにわたしは、本誌第5号と第6号にふれて、「戦時下とはいえ、手書き手づくりの『青松』が、知己の追悼の場として活用されてゆく」と書いた（前掲、本 series『青松』を読む④「手づくりで悼む」）。この指摘について2点の補足をおこよう。

1つは「戦時下とはいえ」の表現。ここでは、戦時下という時世ゆえにひとが死んでゆくという事態をしっかりととどめられないなかで、しかし同人誌の発行の半分もが追悼の場となってしまった、との異様さをあらわそうとしたのだった。では、療養所内で編集発行されていたほかの逐次刊行物が追悼の場となっていなかったのかということ、そうではなかった。

そこで2つには「追悼の場」について。たとえば、『青松』を手書き手づくりとするきっかけに総合誌『藻汐草』の休刊があった。大島の療養所で編集と発行がおこなわれたその逐次刊行物において、その第2巻第3号（1933年5月）が所長の追悼号となったとの事例がある。また療養者が亡くなったときに、故人への弔辞が記されたり追悼句会の記事が掲載されたりしたこともあった。だが、療養者個人の追悼号が編まれたことは、『藻汐草』においては、ただの一例もなかった。そうしたようすに照らすと手書き手づくり『青松』は、それまでの大島の療養所における媒体とはまったくちがった「廻覧雑誌」となったのである。

第7号 横長の判型の本体、表表紙にはうえから誌名、号数、発行年月がいずれも右から左への横書きで記されている「青松」「第七号」は「昭和二十年四月発行」。表表紙には紙片が貼られていた跡がある。残った紙の一部には、「13日／石本総代」との手書き文字が見える。

表表紙見返しに「目次」——「巻頭言」／「週言」／笠居誠一「愚感」／土谷勉「百性の話」／長田穂波「島庵独語」／「潮音」／笠居誠一「短歌」／「潮音」／喜田正秋「俳句」／井上真佐夫「耐乏生活」／喜田正秋「自句自解 二」／小見山和夫「短歌」／「青山荘だよりの病床短歌評」／斉木操「記紀の歌から」／浅野繁「長歌 硫黄島の益良夫に捧げまつる歌」／山上広光外「児童作文」／今村次郎「音信」／「後記」。

ついで挿絵のかわりか、なにかから切り抜かれた印刷物「吉野（森月城筆）」が綴じられている。吉野の桜を描いたのであろうそれは、時節にみあった絵柄ではある。

巻頭言 署名なし。原稿用紙の罫目にきちっとおさまったいねいな文字で――

生命力の旺盛な人がある問題にぶつかる。問題は即ち生の躍進の途上に横たはれる邪魔物である。生命力がこの邪魔物と衝突するところに発する熱が即ち思想である。そしてこの思想が更に火花を散したり美しい花を咲かせたりする所に文学は生れ芸術は育てられる。

――療養所における文芸と宗教は、慰安であり統治の手段といわれることがある。文学であれ宗教であれ、それらを生きる当事者たちにとっては、あたりまえだが、そうではないのだ。

そのつぎの、「戦時生活の大悟また「童心に帰れ」の一語に尽きる」と結ばれる「週言」は、『週報』そのものの切り抜きを貼ったものだった。『週報』481号（か？）の表表紙も綴じられている（そのうえに貼られた原稿用紙に、さきの「巻頭言」が記されている）。

481とみえた『週報』の号数は、431だった。『週報』（情報局編輯、印刷局発行）をみたところ、その第431号（1945年1月31日）の「週言」が『青松』に綴じられたものと一致するとわかった。

愚感 笠居誠一はその稿「愚感」（4月18日夜記）で、療養者は「十人十色」であり、「かくの如く種々様々の者を統率して協和一致の目的に向ふて行進する。総代の心労は大なるものである。然らば総代の心労を軽減せる道は何処にある」と問い、「六百名の病友、老ひも若きも。強きも弱きも。各自がその持場を忠実に守り治療に作業に園長先生他職員各位の指導と協和会総代の指導精神に従ひて。真善美を求め愛島の誠をつくすべきである」と説く。

この時点でいわれる「協和」とは、本来は自治の謂であつた。その代表を担うものがなかなかいないと療養者自身が自覚する現状においては、「此の協和会と言ふ。小社会を行進さすは御役所と病友と相一致の必要がある、特に私達一人一人か忠実に真面目にあるべき

である、凡愚の悲しさ人格識見のある方を目標に日常の生活を改むべきであるが善きにつくよりも悪に走り自我の欲しひままに行く」という「個人主義」が憂慮されている。しかも「戦局」をみれば、「一億体当りで突撃の時。病者は別だと言ふ非国民は無いと思ふ又あつてはならない」という時節なのである。ここで笠居はいう――

然し私は六百病友を一色にせよとか一色になれとは言はぬ、各自の個性を活かしてその持場を忠実に守り。体当りの心~~がまへ~~て精神で行く。〔中略〕常に心のゆとりは持ちて居る必要がある、その心のゆとりを持つものには宗教と文芸がある。何時か長田大兄は青松誌上で各宗教信者の熱意を望んだ。私は思ふ宗教によりて罪より救はれ安心を得しその喜びを文芸方面に活用するなれば島は協和の実を結ぶと思ふ。道は近きにあり各自が個性を活しつゝ愛島の誠をつくす是は亦愛国の精神である。

と、こころにゆとりをもって個性を活かす、そのために宗教と文芸があると説き、両者を連結して活用すれば、「協和」が叶い、「愛島の誠」をつくすことができ、それがさらに「愛国の精神」となると論じたのである。

ここには、療養所での、療養者による、宗教と文芸の活用法が示されたうえで、「協和」と「愛島」と「愛国」が連結、あるいは審級し得るとみせられたのである。療養所における、療養者の、生の実践がみずからによって意味づけられたのだともいえよう。ただし、宗教にしても文芸にしても、おおよそ普遍性をもち得るはずなのだが、療養所におけるそれらは、やはり園の境界内にとどまってしまうのか、あるいは、観察者や研究者や批評者は、それらをどう説くこととなるのか。

笠居は最後に追記を載せた――「人生五十年と言へば私は棺に入るべき人間である、然し生きて居る生きて居る限りは修養にはげむは必要である、若い人々よ、遊ぶ間があれば宗教書又は純文学書を読んで協和会の指導者とならむ事を希望する、凡ての人に失望しても天を仰げば太陽は照り輝いて居る、若人よ光を仰ぎて起て」と、これは若い人びとへむけて飛ばされた檄となっていた。

消火の科学 全3枚だった笠居の稿の2枚め裏には、なにからの切り抜きなのかわから

ない記事が貼りつけてあった。「決戦手帖／消火の科学」との見出しがある。「実際問題」として5つが示され、「(一) 戸、障子等の建具に燃え移った火」「(二) 天井の火」「(三) 階段の火」「(四) 油の火」「(五) エレクトロン焼夷弾の火」、最後は「一般に何の火でも燃え始め程温度も低く消し易いから、その発見と同時に一刻も速く臨機の処置を取ることが肝要である」と注意を伝えている。

百姓 土谷勉の稿は「百姓の話」と題された（目次にあった題目は誤記）。土谷は、「百姓を語るのは私のたのしい一つである」と書きだした。ここにいう「百姓」とは、「米や麦を作るのでなく野菜に限られてゐる」ものをいい、「青松」の同人中には今迄私一人であつたが、上本さんの追悼号から井上（真佐夫）さんが書いてくれたので二人になつた。北山さんは古い百姓であつたが亡くなつてしまつた。今園内に三十人しか居ない百姓だから仕方ないが、何だか淋しいことである」と嘆く。なぜこの人数しかいないのかというと、「道具の関係による」のだそうだ。

「私は時に百姓と文学とは両立しないのだらうかと疑つたりする」といいたくするのはなぜか？——「そんな筈はないが——。だいたい百姓仕事は多忙なのだから文学する暇を割き難いなど原因の一つであらう。私の場合旧畑（焼場の上）が六十六坪、新畑（兎舎の上）が四十九坪、合せて百十五坪であつて、それに年中野菜を絶やすまいとすれば時局柄薬品も肥料もないのだから結構一ヶ年の仕事はある。新畑には肥料一荷担くにも桶の尻が見えるやうな旧坂を攀ちねばならぬ。担ぎはよ←腹の空くものだが、実際背中が折れるやうな空腹を覚える。それだけ体力が要るのだらう。野菜作りは特に人手をとるのださうである」と事情通のように語る土谷も、「七年前の秋生れて始めて鋤を振つた」「七年目の新米」なのだった。「やらう」と決心さへすれば百姓は誰にでもやれるらしい」とは、自分が証人だし証拠だといふかのようだ。だが、「百姓ほど入るには易いが奥行の深いものはない」のだ。そして「毎年つみかさねる失敗が唯一の貴重な教訓である」ともいう。「私は〔中略〕こゝの島畑の地質に一番適した方法をさぐり当てるより他に方法はないと思ふ。それには何より真摯な研究心が必要である」と説く彼の姿勢の具体相をみせるというのか、

「内原訓練所の加藤完治大人が「藩のことは藩に問へ」と言はれたが、この人にしてこの言あり、まことに味合ふべき言葉である」と、満蒙開拓青少年義勇軍を輩出した茨城にある内原訓練所の加藤の言を参照して、さらに、「知つても知つても究まる処がなく、毎年失敗を重ねるのだから、くめども尽きぬ研究心も湧くが興味もある」との感想を記した。

土谷は戦時下の百姓仕事を、「即ち吾々の戦争であり勝つ道である」ととらえてみせる。「特攻隊になれないでも、或は飛行機の増産が出来なくとも、要は三十人の百姓が心根新に私心を去つて一所懸命増産に邁進することである。敢へて私は一所懸命と言ふ」との言辭をくわえる。一生懸命ではなく「一所懸命」というところに、作業に籠める土谷の意思があらわれるというところなのだろう。隔離施設内というかぎられた箇所での、いわば戦時奉公である。

さて、参考にと数値があげられる——「因みに殖産部佐藤主任が農事委員の意見を徴し先日総代の手許まで提出した今期の作附計画表を左に参考までに掲げる。／旧農園作附計画表 昭和二十年度／夏作 馬鈴薯（一人当り） 二十坪／〃 胡瓜〃 十坪／〃 南瓜〃 十坪／〃 茄子〃 二坪／〃 不断草〃 五坪／〃 菜豆（一人当り） 二坪／〃 トマト〃 五坪／ 試験地区 六坪／秋作 葱（一人当り） 十坪／〃 真菜〃 十坪／白菜〃 十坪／ 大根〃 十坪／ 人参〃 四坪／〃 牛蒡〃 五坪／〃 芥菜〃 五坪／ 試験地区〃 六坪／来年の春作／〃 白菜〃 十坪／〃 錦菜〃 十坪／〃 万葉〃 五坪／〃 春葱 五坪／〃 時無大根〃 十坪／ 葉牛蒡〃 五坪／ 玉葱〃 四坪／ 豆類〃 五坪／ 試験地区〃 六坪／新畑作附計画表／夏作 馬鈴薯（一人当り） 四十坪／〃 試験地区〃 四坪／秋作 甘藷〃 四十坪／〃 試験地区〃 四坪／来年の春作／〃 白菜 二十坪／〃 時無大根 二十坪／〃 試験地区 四坪／果樹園作附計画表／夏作 馬鈴薯 一〇五〇坪／〃 胡瓜 五〇坪／〃 南瓜 六〇坪／〃 トマト 一〇〇坪／秋作 甘藷 一二〇〇坪／〃 葱 三〇坪／ 真菜 六〇坪／白菜 六〇坪／ 大根 九〇坪／ 馬鈴薯 六〇坪／来年の春作／玉葱 一五〇坪／西瓜 六〇坪／ ^{〔まくわうり〕} 甜瓜 九〇坪／果樹園収穫ヨ想表／中生桃 五〇♂／長十郎梨 四

〇〇〇〇〇〇 五〇〇〇〇〇 一五〇〇〇〇 密柑 二〇〇〇〇〇 西瓜 (六〇坪) 一〇〇〇〇〇〇
甜瓜 (九〇坪) 九〇〇〇〇〇 [以下の「農産物ヨ想収穫表」は本稿末尾に掲載する]

その裏 土谷の稿は1から29までのノンブルがふられた29枚の紙に記された、じつに膨大な分量となっていた。それらはどういった用紙の裏を活用していたのか。

ノンブル1は、1939年11月30日付の件名が「経済戦強調運動実施ニ関スル件」という「通達」(タイプ印刷)で、「大島療養所長」から「職員患者各位殿」に宛てられている。複数刷られたうちの1枚なのだろう。すでに反故となったということか、大きな×の抹消線が引いてある。

ノンブル2は、薬袋紙(活版印刷)とやはり通達文書(タイプ印刷)かなにかの断片が貼りあわさっている。後者には「5、金ノ売却」「6、物価停止ノ趣旨及内容ノ普及徹底」の文言がみえる。やはり抹消線×あり。

ノンブル3は、そのまね文書のつづきだろう、「3、節米」「4、貯蓄ノ実行」の文字があるタイプ印刷で、大きな抹消線×がある。

ノンブル4も、薬袋紙と通達文書の一部が貼りあわさされていて、後者に「2、物資ノ活用並消費節約」の文字、×の抹消線がある。

ノンブル5は、件名「経済戦強調実施要項」とあるタイプ印刷の文書で(抹消線×あり)、「一、趣旨」「二、期間」「三、実施事項」「1、生活ノ刷新」とあり、ここからノンブル2までがひとつの文書だとわかる。

ノンブル6は、「2、物資ノ活用並消費節約」の項があり(抹消線×あり)、さきにおなじ。ノンブル7はノンブル3とおなじ。ノンブル8はノンブル2におなじ。ノンブル9はノンブル1におなじ。ノンブル10はノンブル2におなじ。ノンブル11はノンブル4におなじ。ノンブル12はノンブル3と同、ノンブル13=ノンブル5、…ここで整理しよう。

No.1 = No.9、No.18

No.2 = No.8、No.10、No.14

No.3 = No.7、No.12、No.15

No.4=No.6、No.11、No.16

No.5=No.13、No.17

ノンブル 19 は、「大島青松園薬局」や「内用薬」などの文字が印刷された紙（名まえなし）。ノンブル 20 も同（名まえあり）、ノンブル 21 は「大島療養所」「内用薬」などの印字があり、すこし古い時代のものとなる（名まえあり）。どちらも名まえは「北山謙三」で故人の持ちものだったか。ノンブル 22 は「大島青松園薬局」の「内用薬」。

ノンブル 23 は、「東京都深川区三好町三ノ一／全日本真理運動本部」が差出人名として印刷され、「香川県木田郡庵治村／大島療養所／編集部御中」の宛て名が手書きで記された、おそらく逐次刊行物用の帯封だろう。消印の日付はない。

ノンブル 24 は「大島青松園薬局」の内用薬票、ノンブル 25 は差出人名はなく、「香川県木田郡庵治村／大島青松園患者慰安会御中」と宛て名が謄写版で刷られた帯封で（「東京／中央局／料金／後納／郵便」の印字あり）、「銃後標語／『護れ興亜の兵の家』」の印字がみえる。

ノンブル 26 は、「六月上旬合同研究歌会」の案内（謄写版刷り）、ノンブル 27 はそのつづきだろう。

ノンブル 28 は、2つの帯封が貼りあわさされていて、1つが「大島療養所御中」（タイプ印刷か）、1つが「大島青松園御中」（謄写版刷り）で、後者の差出人名は「朝日新聞東京本社」（活版印刷）、どちらにも手書きで「礼状スミ」と記されている。ノンブル 29 は「大島青松園薬局」の内用薬票。

『青松』本ページではない、かつて使われていた内用薬票や郵便物の帯封もふくめた面のすべてに赤鉛筆で抹消線が引かれているのは、ここでは袋綴じになっているのではなく、それら反故とする面も表にみえてしまうためなのだろう。

1945年春、使える紙も少なくなってきたか。

島庵独語 穂波生の連載「島庵独語」もしっかりと定着している。本号での紙幅は7枚。

すでに文章を記した原稿用紙の^{おもて}表面を2枚貼りあわせ、かつての裏面を表にしてそこに「島

庵独語」が記されている。「昭和二十年四月十七日記」。ここで穂波生は、「人間の生の価値」「人格」を論じる。

人間は動植物と異なりて『自由意志』を有する、故に主動的である。こゝ責任があり、こゝに又尊厳がある。こゝに判断が働き理想も湧く。この自由の我をヨリ善く活かしめてこそ生の向上がある＝これらをヒキクルメて人格と言ふ＝のである。／人間はヨリ善へ進歩すべく造られて居るもので斯の意味に於てのみ『人格を認む』べきもので、若しそれ、これを破り底下し退歩する如きは＝それ自ら破滅であり＝人間以下と成る故に悪い意味に於ては『人格』と言ふ内容は成立しないし、又存在せない！

——ここでは、療養所に生きる、時局にあった奉公がなかなかにしがたいものたちにとつての「生」や「人格」が論じられている。ついで、

そして人間は社会を作り、境遇を有し、慣習もあり、歴史も持たねばならぬ＝斯る一切に対して『自発的にヨリ善く処して行くこと＝こゝに個性の完生がある。故に個性の完生こそ真の民族的又国家的完生である。決して社会性と個性と別個の存在でない……彼とは是^{（マ）}と別個に取扱ふ意識こそ人格破壊の因であり、そこに二重三重の人格と言ふ怪物的人生と落下なして居るのである。／人間として最も『人格的完全性は愛』であると言はねばならぬ……。

——穂波生は「愛」を説いてゆく。

愛とは自己に向つては生の保全である。自発しては利他奉仕である。これを一番よく生きて居る確な体験は『正しき夫婦の仲』であらふ＝二者は全然的に一体となる＝この内容は愛に於て自他一体と成すもので、説明を越えて完成なしてあるのである……。／この如く人間は＝凡て自発的に生きてこそ自己満足であり又凡てをも生かしめ得るものである＝こゝ大島に於ても真に自己を活かし得る者は他人にも大切な人であり。全体に大切な人は、其人個人としても立派な生存である＝これは現実の確証である。／故に作業など自ら進みて行ふてこそ＝自己の生の真価である……。

——戦時下の現実にたいして、自分たちの「生の真価」を示さなければならない難事への

向きあいがある。

時局柄とて一入に尽忠報国の念に燃ゆるのである。これは決して強制されしが故でない、日本人の紅血より自発する熱火である — 若し強制されし結果ならば奴隷根性以上には出ない — であらふ。それでは機械的活人形に過ぎないのである。／斯る人間は凡て鞭で脅かされるか、縛引されるか、好餌で釣られるか — 必ず他動的に動かされて居る — 即ち一種の家蓄^{イマ}である。人間は自発的に生きざる時は必ず人間以下の動物的に墮落なすものである。／他人を愛し、家を愛し、村を愛し、国を愛し、愛に生きるこそ自己に生きる人である！

——療養所のなかで、「自動的」「自発的」に生きよう＝生きようとするときに見出された、「他人を愛し、家を愛し、村を愛し、国を愛し、愛に生きるこそ自己に生きる人である！」という審級は、戦時下ゆえに得られた思念なのか。

信心に生きる穂波生はまた、「信仰とは即ち — この愛であり — 神の要求するも斯愛である」ととなえながら、現時をみつめる——「愛は義しくして強い！／生命の真実の火であるから！／さて — 玉砕とか神風特攻隊とかの精神は — 即ち国体への自覚より発したる、愛と真に基因し、そこに国民として責任を感じずる故である。こゝに犠牲と言ふべき花は自から開くのであるまいか……。若し此間に何らかの不純な感が混ざれば必ず弱くなる！／同じ戦死にしても動物の如く追込まれし者の死は決して同日の論でなく比較にならぬ」と。

このときの「島庵独語」を穂波生は、「島よりも香れ日本の桜花」と記して閉じた。

潮音 長田穂波のペンになる文章が記された原稿用紙があり（内容は信仰や信心にかかわるようす。「KYOKUTO 10×20」）、そこに7のノンブルがふられている。おそらくさきの「島庵独語」の裏面につづく、反故にした原稿のうちの1枚なのだろう。そこに「土谷」印影の判が押印された「潮音 2」と記された紙片が貼ってあり、「貯蓄」の勧めが説かれている。「貯蓄一本に邁進すれば、戦争は勝に定つてゐる」と確信する土谷が示した園の現状は、「現在、補導部を通じて貯蓄してゐる療友が／二一名／その総金額／四、六三九三、

〇四円／一人宛二二〇円余りである。「金持」などと言ふ勿れ。これも戦ふ園内の一齣である」とのこと。

笠居 「短歌」を笠居誠一が7首——「神域を皇居を襲ふ醜翼にわれ神風となりて当らん／大君の宮居の空を飛ぶ敵機微塵にうたむ八裂にせむ／神霊のいかり尊とし醜翼は帰途の洋上につぎつぎ落つる」、行間が空けられ、少し文字が小さくなって——「玉体の御無事を祈る暁空を特攻隊機音高く飛ぶ／醜翼を祈り落すと睨む空に飛行機雲は白ふ尾を曳く／ゼツト旗は高く揚れり醜翼は今神懸の空を飛べりと／海霧降りて視界の狭き空低う爆音は飛ぶ機影見えめに」。笠居は「八裂」の語を手離さない。「醜翼」の語との組みあわせで、その語が用いられている。

潮音 謄写版刷りの原稿用紙にきちんとした文字が書かれた（笠居のペンか）その面に抹消線がいくつも引かれ、そこに貼られた紙片に「潮音（1）」と記されている。さきとおなじく「土谷」の押印も。これは現状の記録——「昭和二十年四月十四日現在／総員、五六一名／〇普通室三二六名／男二四一名／女八五名／〇特定室一三五名／男^{〔ママ〕}二七名／女一〇八名／〇作業希望者一七九名／男一二八名／女五一名／作業数（役員を除く）一九七／余り一八」。

喜田 「俳句 作品」7句は喜田正秋——「桑枯れてあたり明るき藁家かな／ふところに消炭入れて戻りけり／なが病や夜着にたまれる春の埃／ひたすらに生きむ希ひや寒灸／雪晴や丘の上なる雲井療／霽笹に青く光れる氷柱かな／霽笹をこゆる波あり寒の月」。

浅野 「目次」にはない稿が、子どもが記したような字がみえる原稿用紙のうえに貼られた紙片に記されている。「“万葉集新解” 武田祐吉著／大伴家持 其一」、文末に「繁記写」とある。

井上 「十行 廿字詰」「西香 49 規格 A4」の文字と罫目が印刷された原稿用紙に、井上真佐夫が「随筆 耐乏生活」を記した。「戦ひは愈々我が本土に迫つて来た。心耳を澄ませば、沖縄周辺に熾烈果敢寸隙を入れず咆哮する敵撃滅の火砲と、奇想天外の不可能事が我忠勇なる神鷲によつて難なく決行せられてゐる」いま、「真の重大時局下、病むとは言へ

憂国の若い血潮が五体中に脈々としてたぎり立つのを覚えるものである。／『吾々もよし病むとは言へ、許されるならば此の身此の五体を爆薬になぞらへて、醜敵撃攘の第一線に散りたい』／と、悲壮な決意を眉宇に秘めて三人寄ればさゝやき、五人集れば語り合つてゐる」という井上は、そこで語られる語は、「この身は病むと言へども、皇国に生を享けたる者のひとしく抱く憂国の声であり、尽忠の叫びでなくてなんであらうか」とうたえる。

もういちど、「現身は病むとは言へども、おのづから眉のあがる想ひがする」と記したうえで、『許されるならば吾々も爆弾になりたい』とのひたむきな気持がぐんぐん頭をもちあげて来るのである。だが、現実の姿を正視する時詢に心淋しいものがある」と自己をみたすえに、「吾々には何等生産の力もなければ、身をもつて国難にこたへ、皇恩に報ひ奉る術もない」と悄然としながらも、「然し吾々も銃こそ執らねどこの有史以来の国難である一大戦争に参加してゐると自らを慰め励ましてゐる者である。“耐乏生活”これが吾々に課せられたる日常の戦ひである。治療に、衣に、食に不自由勝ちではある。だが、吾々は不自由を不自由とせず、むしろ不自由を喜び、不自由に感謝せねばならぬと思ふ。それは病者と言へども国を挙げてこの戦ひに参加してゐるからである」とのべた。「耐乏生活」＝「不自由」、これをどうするかが「吾々に課せられたる日常の戦ひ」ということだ。

自 解 喜田正秋「自句自解」——「玉砕とふ語はかなし瀧落ちに落つ」がとりあげられた。

此の句は昭和拾八年五月アツツ島に於て壮烈鬼神として泣かしむる最後をとげた、山崎部隊全員玉砕の報にもものした句である。／古来生命よりも名を重んずる我が国の武士は、その最後の段階に突入するや「瓦となつて全からんより玉と砕くるが武士の本懐」笑つて悠久の大義に殉じたものだ。／山崎部隊長以下の将兵は孤立無援の僻島によく敵の大部隊と戦ひ、然して最後の段階に突入するや驕敵の投降^{〔ママ〕}告をしりぞけて全員こぞつて悠久の大義に殉じたのだ。／「玉砕」といふ語からうける感じは潔ぎよを感じせしめるが、煎じつめれば敵のために皆殺しに会つたのである。／想へば無念至極なことだ……。／我々国民ひとしく感謝と共に哀悼の誠を捧ぐる次第だ…。／原句「玉砕と云ふ語はか

なし風光る」であつたが推敲の末、「玉砕とふ語はかなし」率直に叙し以下「瀧落ちに落つ」と結ぶことにより、壮烈かつ壮大なる感じを深刻に表現なし得たと愚信してゐる。——「玉砕」を「煎じつめれば敵のために皆殺しに会つたのである」と見抜きながらも、その語の虚妄を撃つのではなく、かえって、「かなし」とうけ、「無念至極」と慨嘆するのだった。

短歌 「十行二十字詰 逸見製」の名と楯目が印刷された原稿用紙の表裏に、小見山和夫 13 首——「物読まむ視力あへなし在経つつ長き春日をこもらひにけり／身のめぐり春のいのちのさかんなる息吹に思へばなほぞ生きたき／春宵の灯にかざし一つ一枚の葉書何すれや読みあへなくに／ほかほかと日のの色匂ふま垣根のはこべの花は風そたけつつ／陽の昼は風にふくらむ池水の眼にさやりなしいろ匂ふにぞ／夕闇にもの洗ふ娘か背戸の辺の水のひびきも春めきにけり／書きつがむ視力あへなしばしばと行は見つめてま昼明きに／あたたかき飯に箸とる朝あさのかたじけなさに狎れておどろく／読み書きを人に頼りて疑はぬわが居まはりやすでに久しき」。

4 首は裏に——「ものの種つぶさに芽生ふ庭の昼打水の匂ひ乾きつつあり／雀来てはこべつひばむ夕光もつくづくと久し馴れて思へば／つぶやきて眼先暗し春日は眼鏡の玉をいくたびぬぐふ／空襲の情報止みし春宵のラジオの楽がふかく身に沁む」。

小見山が本誌第 5 号に寄せた 1 首に、「短日や友がたどたと読む記事に耳に馴れつゝ吾は盲ひにけり」があつた。見えない彼はことのほか「匂ひ」に気を、鼻を、とめたか。

青山荘主人 楯目が黄色で印刷された原稿用紙の表裏両面を使って 9 ページもの紙幅となつた稿 1 枚めの欄外に「青山荘だよりの病床短歌評 浅野繁」と筆で記されている。本文はペン書きで筆跡も違う。この本文は、浅野繁から「林文雄先生」に宛てられた書簡だった（4 月 21 日付）。林が執筆した「青山荘だより」への応答を、病床の林に宛てた手紙となっている。その一部をみよう。「青松の進むべき道」との見出しがある——

われわれは往々にして自己本然の進むべき道に迷ふ、さうした時このやうに素直に腹蔵の無い飾りつ気のないこゑを聴かされる事は実に嬉しい、この真実のこゑによつて自己

の航路があやまりなきを知りどれほど勇気づけられる事か、文芸のジャングル地帯へ無二無三に突進することが出来る、われわれは他動的に何時も在り経てはならないが、然し自動的に行動してゐる場合でも、何等かのものに頼つてゐる、即ち他動の分子が幾分なりとも浸潤してゐる事を知る、心の底でハ何時も積極的に行動すべくすべてわれとわが心を鼓舞してゐるが、それが容易に永続しない、ともすると隠遁的な殻の中へ閉ぢ籠らうとする、口でハ容易に喋れても行動が正反対である場合が多い、さうした意味合ひから“青松の進むべき道”を読み豁然として大道の開かれた如くに思ふ、多謝あるのみと。

これには、「直言は最も有難いものである」と結ばれた、4月28日付の林からの返信もついている。

斉木稿裏面 斉木操「(短歌鑑賞) / 記紀の歌から」は、なぜか赤インクで記されている。印刷された原稿用紙の柘目(謄写版刷りか)に文字が記されているが、その裏面にもまた文字が記され、その方のインクが濃いために、斉木の文章はとても読みづらい。ここでは斉木の稿はひとまずおこう。

綴じのつごうで、7枚ある稿の最後はその裏面をみることが出来る。「批評」と題字体の文字があり、そのしたに、「誠一・克彦・鴿子郎・繁・ / 正美・冽・和夫」の名が列挙されている。そのつぎに石川松子の短歌があり、それへの笠居誠一と赤沢正美の批評がある。ページノブルが11と12。

前号第6号にもこれとおなじ様式のページがあり、ページノブル19と20が記されたその裏面は、やはり斉木の稿「「短歌」 / ‘父の死’ 其の一」だった。没となったか下書きだったのか、ともかく反故となった稿の一部を、斉木はくりかえし再利用していたのだった。

硫黄島 療養者によって、くりかえし硫黄島が詠われている。浅野繁「硫黄島の益荒雄に捧げまつる歌 并 短歌」は、「こゑ絞り太刀振りかむり、無二、無三、触るる切り裂きまさきくも還りか、来しも、一人、はた、二人と、斃れ」と地獄絵と喩えられようようすを

詠む。反歌——「地は裂け身はかくすなき島にして阿修羅なすかもますらをの伴／陣前に敵をひきよせ撃つべくは目にもとまらずその太刀先に／霰なす敵の砲火は耐へにたへ如何にか兵の飛機待つらむぞ／空をかもうち覆ひたる爆煙に眦裂きて戦ふか兵は／わだの島ひとたび醜夷にゆるすとも必撃ちてみたま鎮めむ」。

子ども 初五の中井八千代「お風呂」は、かつて家にあった風呂桶と、「ここのお風呂」をくらべて「びつくり」したようすを記した。高一の庫元和恵「風呂」もかつて「みんなでたのしく家に帰」ることができた「町の風呂」を記す。何か所か修正の赤が入る。

ほかに、高二岡崎安彦「南京虫」、高二戸田次郎「電信線の露」、高二大西哲司「故郷の思ひ出」、高二山上広元「藤の花」がある。

てっちゃんの文章を読もう——

僕は徳島の田舎に生れた。／小さいときにはよく兄弟喧嘩をし、又、夜おそくまで遊びに行つて帰らず、母親にしかられた事もよく有つた。それも今ではなつかしい思ひ出の一つである。僕が六歳の時、家の暮しに困るので、東京の叔父さんの所へあづけられた。叔父さんは僕をさびしがらないように、仕事のひまには、映画や公園などにつれて行つて下さり、僕を我が子のようにか愛がつて下さつた。又、お正月には叔父さんと宮城へ行つて拝んだ事もあつた。しかし七歳のとしの末に、余りいたづらすぎると言つて家へかへされた。今でも思ひ出すたびに、もう少しおとなしくして居ればよかつたと思ふ事がよく有る。／以上

もうひとり、山上の「藤の花」——

僕が大島に来た時は、藤の花は開かうか開くまいかとしてゐる時であつた。／少ししてから、淋しくなつたので、分室の前の藤の花の下にをると、藤の花は、下を向いて、なにか僕に話かけてゐるやうに見える、僕は淋しさが、一ぺんになくなつた。又桜の花は、今を盛りと、桜花国の^{さくら}みを見せてゐた。つづじもさいてゐた。それだから、この三つの花は僕と友達である。その内でも藤の花は僕の、淋しさをなくしてくれたのだから、第一の友達である。今も昔もかはらずさく藤の花は大分つぼみがふくらみかけてゐる。待

遠しい、藤の花早くさけよ 以上

——いまでも大島に藤棚がある。福祉室のまえだが、かつてとは場所が異なるのだろうか。


子どもたちの文章は、貼りあわせで1枚となるようにつくってある、謄写版で柵目が刷られた原稿用紙に記されていた。

今村 「目次」にいう今村次郎「音信」とは、差出人が、「熊本市／熊本医科大学薬理学教室／今村次郎／（中支江西省南昌市／同仁会南昌博愛園癩治療研究所勤務）」で、宛所が「香川県木田郡庵治村／大島青松園／患者総代様／〃副総代様」となり、封筒の裏には「昭和二十年四月十三日」と記してある（封筒表の消印も右端に「13」とある数字だけ判読可）。「今村次郎」とその名が欄外に印刷された縦罫紙に記された書簡である。

先日は突然お邪魔いたし野島園長殿、林文雄博士にお会ひ出来、大島青松園を見学させて頂き、私としましては大変うれしい事でした。その節、皆様にもお会ひして青松園独自の自治会の組織内容等に関しまして種々なる御高説を拝聴いたし、まことにありがとうございました。私共の癩研究所は患者僅かに八十名ですがまだまだ未完成のところばかりです。貴方方の自治会を手本として今後どしどしと改良すべき点は改良し大いにやっけてゆきたいと考へてをります。支那の患者を貴方方の弟と考へ、今後何卒よろしく御指導下さい。六月頃再び渡支して大いに頑張りたいと考へてをります。貴方方とお会ひしてお話出来たことをいろいろと工夫し、よりよい生活をさしてやりたい希望に燃えてをります。皆様の自治会の発展をお祈りして筆を擱きます。では之で失礼いたします。

／同仁会南昌博愛園癩治療研究所／医長／今村次郎／患者総代様

——「自治会」と記したのは部外者ゆえか、あるいは懇談にさいして療養者から「自治会」との説明があったのか、「青松園独自の自治会の組織内容等」とは、通り一遍のごあいさつでいどの言葉なのか。

あとがき 本号の「あとがき」には、の署名がある。編集発行の事情が記される——第七号はもつと早く出す考へであつたが編輯子が色々な雑事に追はれてゐたため、遂に遅刊してしまつた事を深く御詫びする。

本号ができあがった時期は4月下旬だろう——「桜の花も、もう終りとなつた。散りゆく桜の花を見てみると南海に激戦を交へてゐらるる神風特別攻撃隊の益良夫の息吹きをひしひしと感じ、藤田東湖の「正気の歌」を思ひ、一種、悲壮な気持に襲はれる」とは編集時の感慨か。

掲載稿については——

今回は固いものが無いが笠居兄の「愚感」が現在の大島の諸相と照し合して読まるとき心の扉を叩くあるものがあると信ずる。／土谷兄の「百性の話」、百性の苦労はなみ大抵のものではない。一茎の葱にも、一本の大根にも、馬鈴薯にも、どれほど尊い汗が沁み込んである事か、「薯のことは薯に問へ」とか言はれた加藤寛治先生の御言葉もさることながら百性の容易でないことを知ることが出来ると共に、今期作附表と対照して興味あるものと思ふ。／長田兄の「島庵独語」、人生の様相を探求する兄独自の筆致と人間味のある論説は、さぞかしわれわれに人生の指針を与へることと信ずる。乞必読／井上兄の随筆「耐乏生活」、前号に於て「上本兄の想出」を綴られた兄は再び「耐乏生活」に於てわれわれの心の叫びを、その実生活に具現する一里塚を示された。／斉木兄の短歌鑑賞「記紀の歌から」、久振りに短歌鑑賞の随筆をよせられた斉木兄の特長のある筆致は記紀の歌を探究する上にとつても必ずよい礎石となる事と思ふ。／その外、喜田兄の「自句自解」、俳句を学ぶもののよい指示となると思ふ。／今回は短歌、俳句ともあまりふるはなかつた。健康情態のいかんによつてただちに作品に影響することは淋しいことであるがいなむことの出来ない事実である。／次号は奮起されんことを諸兄に望む。／児童の作文を六篇ほど載せてみた。各々ものの見方の異つてゐる点、そこに澄んだ眼を感じ喜ばれるものと思ふ。

青山荘だより 林はこの『青松』を気に入っていたようだ。浅野の稿につづけて「青山荘だより」を寄せている。

創刊以来の美しい装の青松である、浅野兄の人柄がにじみ出してゐる。表紙、表紙裏の何気ない緑の線にしても絵心のある事が解る、短歌の色彩歌人といつか評したが矢張り

当ってゐたと思ふ。／たゞ一回の座談会で逢ったのみの人が多いのに青松でハ友達の様になってしまった、／小見山兄の深い深い歌を見て兄ハこんなに不自由なのかなと嘆声を発する。／鹿児島で文芸人の大抵若かったので錯覚を起す。／長田兄の論文、いつも新しくよませる。飽きない。深い祈の結果であらふ。斉木兄の努力敬服／子供の綴方大變立派になった。嬉しい。

『青松』好きの林は、その同人たちとしょっちゅう顔をあわせているわけではなかったようだ。

その裏は反故か。林の手とみえる文章は、「春の島は美しい。つゝがさめて来たと思ふと高い木が真白なふさの花を垂れる」に始まり、「四日の夜の雨で四手桜^{〔してざくら〕}は大抵散ってしまった。植物に問外漢だった自分もこの美しい島で眼が開かれた」と終わる。原稿用紙には「十行二十字詰」の文字が印刷されている。

林のたよりはもう1枚へとつづく——「◎大島医官のビルマ病床だよりが先日葉書十八枚になって夫人に届いた。俳句百六十六句。今小生抜粋し清書して居る。近日回覧にしたいと思ふ。／大松の後方にたごの木がありて風吹くごとに白き花見ゆ／池の辺に近く四手桜高くして花かゞげしを松が覆へり／5/V^{〔マ マ〕}（青山莊主人）」これは5月5日付か。いったん第7号がまとまったあとでの寄稿か。池とは貯水池のことか。いまこの四手桜はあるか。

裏表紙見返しに「林東風」の署名がある紙片が貼られている。これも林文雄だろう。「隣家の幼児病歿す／母親と老母の方を慰めて」の題で——「春の燭かざし夜すがら看とりしを／春暁やはや臨終を待つばかり／惜春や初孫にして男なりしを／島つゝじ撩乱たる中にみまかりし／牡丹をいけて幼の枢かな／ほゝえみて眠りて春の枢かな／青き踏むべかりし小靴亡きがらに／桜葉の青きをふまんこの小靴／覚めて笑め迦陵頻伽の囀りに／葉桜に佇ちて幼の枢まつ／喪章胸に白衣一群 = 葉／出棺す葉桜となりてゐたりけり」。

廻順 裏表紙に回覧の順序を記した紙片が貼ってある——「廻順／井上、三吉^{〔病〕}、笠居（炊）、松田、斉木／小見山、長田、少年室少女室、谷本、喜田、浅野／泉→戻り土谷／◎泉さんの手で次号がやがて出ます。出来るだけ早く廻して下さい。／◎原稿不足を克服し

お互に頑張らませう」。相変わらず回覧は遅いのか。

後筆か、紙片の貼っていないところに「第7号」の文字がある。

農産物予想収穫表		〔漢数字をアラビア数字にあらためた〕				
種目	地所	坪数	坪収	総収	単価	総金高
馬鈴薯	旧畑	620	1.2 ㍊	744 ㍊	.30	223.2円
〃	新畑	1200	0.6 ㍊	720 ㍊	〃	216.0円
〃	果樹園	1050	1.0 ㍊	1050 ㍊	〃	315.0円
胡瓜	旧畑	300	2 ㍊	600 ㍊	.20	120.0円
〃	果樹園	50	2 ㍊	100 ㍊	〃	20.0円
南瓜	旧畑	300	2 ㍊	600 ㍊	.25	150.0円
〃	果樹園	60	2 ㍊	120 ㍊	〃	30.0円
茄子	旧畑	60	1.5 ㍊	90 ㍊	.25	22.5円
不断草	旧畑	150	3 ㍊	450 ㍊	.07	31.50円
菜豆	旧畑	60	1 ㍊	60 ㍊	.50	30.00円
トマト	旧畑	150	1.5 ㍊	225 ㍊	.35	78.75円
甘藷	新畑	1200	1.2 ㍊	1500 ㍊	.35	525.0円
〃	果樹園	1200	1.7 ㍊	2000 ㍊	〃	700.0円
葱	旧畑	300	4 ㍊	1200 ㍊	.15	180.0円
〃	果樹園	30	4 ㍊	120 ㍊	〃	18.0円
真菜	旧畑	300	6 ㍊	1800 ㍊	.07	126.0円
〃	果樹園	60	5 ㍊	300 ㍊	〃	121.0円
白菜	旧畑	300	5 ㍊	1500 ㍊	.08	12.0円
〃	果樹園	60	4 ㍊	240 ㍊		19.2円
大根	旧畑	300	3 ㍊	900 ㍊	.12	108.0円
	果樹園	90	3 ㍊	270 ㍊		32.4円
人参	旧畑	120	1 ㍊	120 ㍊	.40	48.0円
牛蒡	旧畑	150	8 ㍊	120 ㍊	.50	60.0円
春葱	旧畑	150	4 ㍊	600 ㍊	.10	60.0円
時無大根	旧畑	300	35 ㍊	1050 ㍊	.12	126.0円
〃	新畑	600	2.25 ㍊	1350 ㍊	〃	162.0円
葉牛蒡	旧畑	150	2 ㍊	300 ㍊	.25	75.0円
玉葱	旧畑	120	2 ㍊	240 ㍊	.30	72.0円
〃	果樹園	50	2 ㍊	100 ㍊		30.0円
豆類	旧畑	150	0.5 ㍊	75 ㍊	.90	67.5円
芥菜	旧畑	150	5 ㍊	750 ㍊	0.8	60.0円
白菜	旧畑	300	5 ㍊	1500 ㍊	0.8	120.0円
白菜	新畑	600	2.25 ㍊	1350 ㍊	0.8	108.0円
錦菜	旧畑	300	3 ㍊	900 ㍊	0.9	81.0円
万葉	旧畑	150	4 ㍊	600 ㍊	0.9	54.0円
西瓜	果樹園	60	1.5 ㍊	90 ㍊	60.0	54.0円
甜瓜	〃	90	1 ㍊	90 ㍊	70.0	63.0円

畑 別	総坪数	坪当収穫	総収穫	坪当収入	総収入金高
旧畑指定地区	1848.6	8.616 ㄥ	15924.00 ㄥ	1.317円	2538.45円
〃 試験地区	205.4	6.210 ㄥ	1274 ㄥ	0.99	203.08円
小 計	2054坪		17198 ㄥ		2741.52円
新畑指定地区	1233坪	4 ㄥ	4920 ㄥ	0.82円弱	1011円
〃 試験地区	137坪	2.854 ㄥ	394 ㄥ	0.59	80.89円
小 計	1370坪		5314 ㄥ		1091.89円
小作地区合計	3424坪		2251 ㄥ		3833.41円
◎果樹園野菜畑			4640 ㄥ		
果物畑			490 ㄥ		
小 計			5130 ㄥ		

畑 別	一人当平均坪数	坪当収入	総収入	坪当収穫	総収穫
旧畑指定地区	58.8坪	1.37円	80.83円	8.616 ㄨ	508.344 ㄨ
〃 試験地区	6.5坪	0.99円	6.43円	6.21 ㄨ	40.365 ㄨ
新畑指定地区	40.5坪	0.82円	32.8円	4. ㄨ	160.00 ㄨ
〃 試験地区	45坪	0.59円	2.65円	2.854 ㄨ	12.843 ㄨ
合 計	110.3坪	3.77円	122.71円	21.682 ㄨ	721.552 ㄨ
◎小作者一人当平均支出ヨ想表					
明細略					
支出合計 55円54銭		坪当平均五十銭強			
農作者一人当平均収入金額					
一金 122円71銭					
農作者一人当平均支出金額					
一金 55円54銭					
農作者一人当純収入金額					
一金 67円17銭					